

喜界島八月踊り歌テキストにおける音数律制約

| | |
|-----|---|
| 著者 | 西岡 敏 |
| 出版者 | 法政大学沖縄文化研究所 |
| 雑誌名 | 琉球の方言 |
| 巻 | 21 |
| ページ | 43-55 |
| 発行年 | 1997-03-31 |
| URL | http://hdl.handle.net/10114/11918 |

喜界島八月踊り歌テキストにおける音数律制約

西 岡 敏

〔要旨〕 喜界島八月踊り歌テキストには、日常の方言よりも古い音を残している語彙と、日常の方言ではすでに廃れた古い語法とが残存している。その要因の一つは、音数律の強固な制約に帰することができる。

〔キーワード〕 喜界島方言・八月踊り歌・音数律・音変化阻止・形態変化阻止

§1. 序言

筆者は、1996年6月22日から7月1日まで、喜界島において言語調査を行なった。語彙収集のほか、言語作品として喜界島の八月踊り歌テキストの収集にも取り組み、その記述を試みた(注1)。

八月踊りとは「奄美大島・加計呂麻島・喜界島の各集落で旧暦8月に踊られる集団舞踊」であり、その「踊りは円陣を作り、男女半々に分かれて歌を掛け合いつつ踊るのが一般的な形である」(小川学夫 1983:222-223)。その舞踊に伴う歌謡が「八月踊り歌」である。

今回の調査では、喜界島の八月踊り歌テキストの言語学的記述を試みようとしたのであるが、その途中で、喜界島の方言語彙の音と、八月踊り歌に出てくるその語彙の音とが、異なるという現象にぶつかった。このような日常言語(方言)と詩的言語(歌謡語)との乖離については、大まかに言って、次の二つの事柄を挙げることができる。

- ① 日常の喜界島方言で起こった音変化が八月踊り歌の中では起こっていない(古い音の保持)。
- ② 日常の喜界島方言では廃れて使用されていない語法が八月踊り歌の中では存在する(古い語法の保持)。

本稿では、これら古い音や古い語法が残存する原因のひとつに詩的言語(歌謡語)の音数律が深く関与していることを具体的に検証していきたい。

§2. 喜界島八月踊り歌の音数律について

喜界島八月踊り歌は、節を付けずに詠むと、多くが、8・8・8・6拍という琉歌形式の音数律をもっている。この琉歌形式において、最初の8拍を「第1句」、次の8拍を「第2句」、三番目の8拍を「第3句」、最後の6拍を「第4句」と呼ぶことにする。この形式と

は別に、本土の影響を強く受けたと思われる歌の形式も存在するが、その歌については本稿では省略する。

ここで本稿の前提となる知識を提示しておこう。節を付けないとき、喜界島八月踊り歌では、日常の喜界島方言の長母音が短母音で詠まれる。(1)の下線部注目に注目していただきたい(注2)。

- (1) sjimaja zjanu sjimamu | kawaru zjija neranu | midunji waKasariTi | kuTuba kawaru

シマヤ ジャヌ シマム | カワル ジヤ ネラヌ | ミドゥニ ワカサリてい | クとうバ
カワル

集落はどこの集落でも集落自体が異なるわけではない。しかし、使う水が異なると言葉が変わってしまう。

(湾集落：大山哲夫 1995:6、1996年6月24日、大山哲夫氏へのインタビューをもとに筆者が音声表記した。以下、湾集落の用例はこれと同様である)。

湾集落の方言では[ʔzja:] (「どこ」の意。上野善道 1992:65) と長い母音であるが、八月踊り歌を詠むときは短い[zja]である。本稿ではこれを「長音禁止制約」と呼ぶ。沖縄本島における琉歌と同じ現象である(服部四郎 1959:137-138)。

日常の喜界島方言においては、長母音の[e:]や[o:]は存在するが、短母音の[e]や[o]が存在しにくい。ところが、喜界島八月踊り歌になると、上の「長音禁止制約」によって、短母音の[e]や[o]が出現する。(2)の下線部に注目。

- (2) ʔiCjizjibama kuiTi | sumijusjiba kuiTi | naKama sura merabi | Cjumidu miCjaru

イチジバマ クイてい | スミユシバ クイてい | ナカマ スラ メラビ | ちゅミドゥ
ミチャル

池治(集落名)の浜を越えて、住吉(地名)を越えて、中間(集落名)の美しい娘を一目見たことだ。

(湾集落：大山 1995:12)

湾集落の方言では[ʔme:ʔra:bi] (「娘」の意。上野 1992:129) のように[e:]が長い母音であるが、八月踊り歌を詠むときは短く[merabi]と詠む。これも沖縄本島における琉歌と同じである(服部 1959:138)。

以上のことを前提知識として本題に入っていきたい。

§ 3. 音数律と古音の保持

以下に述べる「音変化阻止の現象」は、詩的言語（歌謡語）の「音数律」によって明確に動機づけられる。

§ 3.1. 音数律の優先（その1）：「音数律が音変化を阻止する」

音数律が古音の保持に深く関与していることをこれから見ていきたい。琉歌形式（8 8 8 6）などの定型テキストでは、音数律に合わせることを何よりもまず優先させる。音数律の優先は歌謡語の音変化に重大な影響を及ぼし、次の2種類の方向性を生む。

場合① 音数律を壊す音変化を回避する。→音数律による音変化阻止

（日常言語との乖離）

場合② 音変化した新しい音形を音数律の整合に利用する。

これだけでは分かりにくいので、具体例を挙げて説明したい。

§ 3.1.1. k 音の脱落をめぐる

場合①：日常の喜界島方言では広母音に挟まれた k 音が脱落するが、八月踊り歌の歌謡では音数律を維持するためにこれを回避する。

(3) 'asubi suru naKanji | 'uTa CjiraCji 'uKuna | 'uTa CjiraCji 'uKiba | jusuga warau

アスビ スル ナかニ ウた ちらち ウくナ ウた ちらち ウきバ ユスガ ワラ
ウ

歌遊びをしている途中で歌を途切らせておくな。歌を途切らせておくと他人が笑うだろうから。

（上嘉鉄集落：生島常範 1994b:3、1996年6月26日、生島常範氏へのインタビューをもとに筆者が音声表記した。以下、上嘉鉄集落の用例はこれと同様である）。

第1句

○1. 'asubi suru naKanji

×2. 'asubi suru na:nji

×3. 'asubi suru nanji

問題は(3)の下線部[naKa]で、標準語の「なか」（中）に対応する。「なか」（中）に対応する上嘉鉄集落の日常の方言語形は[^hna:]（上野 1992:101）である。そこでは、[naKa]から、

広い母音[a]に挟まれたk音がすでに脱落している。

三例のうち、1. が選択され、2. や3. の発音は避けられる。琉歌形式では長母音を短母音で詠む規則があることは§2. で述べた。この「長音禁止制約」によって、2. の[nanji]は認められない。そうすると、3. の[nanji]が考えられるが、[ʼasubi suru nanji]では7拍で、必要な8拍に1拍足りない。ゆえに、1. における[naKanji]のk音が落ちていない古い音形が選択される。

場合②：日常の喜界島方言では広母音に挟まれたk音が脱落するが、八月踊り歌の歌謡では音数律を整合するためにこの新しい音形を積極的に利用する。

(4) durunu nanu hasuja | durusubadu saCjuri | miriju tamaguganI | tamasji 'iriju

ドゥルヌ ナヌ ハスヤ | ドゥルスバドゥ サちゅり | ミリユ タマグガニィ | タマシ
イリュ

泥の中の蓮は泥のそばに咲いている。見よ、愛しい子よ。しっかりしなさい。

(羽里集落：1996年6月25日、龍田八重子氏へのインタビューをもとに筆者が音声表記した。以下、羽里集落の用例はこれと同様である)。

第1句

×1.durunu naKanu hasuja

×2.durunu na:nu hasuja

○3.durunu nanu hasuja

問題は(4)の下線部[na]で、これも標準語の「なか」(中)に対応する。「なか」(中)に対応する羽里集落の方言語形は、上嘉鉄集落と同じく[ʼna:] (上野 1992:101)。

k音脱落によって出来た新しい音形から、「長音禁止制約」によって長母音を短母音化させると、音数律に合致する。すなわち、1. と2. は第1句が9拍で1拍余分であり、2. の音形[na:nu]に「長音禁止制約」を被せて短母音化させると、ちょうど8拍になる。ゆえに、[naKanu]のk音が落ち、なおかつ短母音化した3. の音形[nanu]が選択される。

このように、同じ「なか」(中)に対応する語彙でも音数律の制約によって発音が異なってしまう。

§ 3.1.2. w音の脱落をめぐる

§ 3.1.1. と相似する例をさらに挙げておこう。

場合①：日常の喜界島方言では広母音に挟まれたw音が脱落するが、八月踊り歌の歌謡では音数律を維持するためにこれを回避する。

(5) hazaTu Tubugawadi | miduKuminu merabi | mimaju KuruKuruTu | wa kana Cjagisa

ハザとう とうブガワディ | ミドゥクミヌ メラビ | ミマユ クルクルとう | ワ カナ
ちゃギサ

羽里集落の坪川で水汲みをする娘は、目がくりっとして美しいから自分の恋人にしたいものだ。

(羽里集落)

第1句

○1.hazaTu Tubugawadi

×2.hazaTu Tubuga:di

×3.hazaTu Tubugadi

問題は(5)の下線部[gawa]で、この語は「かわ」(川)に対応する。「かわ」(川)に対応する羽里集落の方言語形は[ha^h:] (上野 1992:107) で、日常の方言においてw音はすでに脱落している。

三例のうち、1. が選択され、2. や3. の発音は避けられる。理由は§ 3.1.1. と同じである。「長音禁止制約」によって、2. の[Tubuga:]は認められない。3. の[hazaTu Tubugadi]では7拍で、8拍に1拍足りない。ゆえに、1. における[wa]のw音が落ちていない音形が選択される。

場合②：日常の喜界島方言では広母音に挟まれたw音が脱落するが、八月踊り歌の歌謡では音数律を整合するためにこの新しい音形を積極的に利用する。

(6) 'abusjiganu miduja | 'uragiriba tumaru | 'asubisuCji wanuja | tumija naranu

アブシガヌ ミドゥヤ | ウラギリバ トゥマル | アスビスち ワヌヤ | トゥミヤ ナラヌ

畦を流れる水は止めようと思えば止められるが、遊び好きの私は止めることができない。

(上嘉鉄集落：生島 1994b:1)

第1句

×1. 'abusjigawanu miduja

×2. 'abusjiga:nu miduja

○3. 'abusjiganu miduja

問題は(5)と同じ語彙、(6)の下線部[ga]で、「かわ」(川)に対応する語彙である。上嘉鉄集落の方言語形は[haː] (上野 1992:107 ただし、「古」とある)。

3. が選択されるのは§ 3.1.1. と同じ理由による。1. と 2. は第1句が9拍で1拍余分であるが、2. の音形['abusjiga:]に「長音禁止制約」を被せて短母音化させると、ちょうど8拍になる。ゆえに、[gawa]のw音が落ち、なおかつ短母音化した3.の音形[ga]が選択される。

このように、同じ「かわ」に対応する語彙でも音数律の制約によって発音が異なってしまうのである。

§ 3.1.3. 'u 音の脱落をめぐる

「うま」(馬)、「うまれ」(生まれ～)、「うみ」(海)も、場合①と場合②の両者が存在する。いずれも語頭['u]の有無で拍数を整合させる形をとる(['u]の次の子音が[m]であることも共通している)。

| | 場合① | : | 場合② |
|-----|---------|---|-------|
| 馬 | 'uma | | ma |
| 生まれ | 'umari- | | mari- |
| 海 | 'umi | | mi |

ここで問題にしたいのは、「うみ」(海)に対応する語彙である。「うま」(馬)や「うまれ～」(生まれ～)については、日常の方言も集落によって語頭の['u]が脱落していない集落と脱落している集落とに分かれるので、音数律と日常方言の音変化を絡めて議論できる(上野 1992:80、上野善道・西岡敏 1993:283)。ところが、困ったことに、「うみ」(海)に対応する日常の方言語彙は全集落的に語頭の['u]が脱落していない(上野 1992:97)。にもかかわらず、ある八月踊り歌の中では、場合②の適用で['u]が脱落している。(8)の下線部に特に注目してほしい。

場合①

(7) 'uminu sjiranaminji | suminu kaKarijumi | mumuda sjiraKabinji | kaKaba mijumi

ウミン シラナミニ | スミン カカリユミ | ムムダ シラカビニ | カカバ ミユミ

海の白波に墨で書くことができるか。百田白紙に書いたら見てくれるか。

(坂嶺集落：英啓太郎 1990:1、1996年6月26日、英啓太郎氏へのインタビューをもとに筆者が音声表記した。

坂嶺集落の方言語形は[ʔu_umi] (上野 1992:97)。日常の方言でも[ʔu]は脱落していない。

場合②

(8) njisjinu mimu 'ariTi | hjiganu mimu 'ariTi | 'ijusaKana neranu | wa 'uTa nasaKi

ニシヌ ミム アリてい ヒガヌ ミム アリてい イユサカナ ネラヌ ワ ウた
ナサキ

西の海も荒れて、東の海も荒れて、魚もないので、私の歌で慰めにしてください。

(上嘉鉄集落：生島 1994b:3)

上嘉鉄集落の方言語形も[ʔu_umi] (上野 1992:97)。日常の方言では[ʔu]は脱落していない。

第1句

×1.njisjinu 'umimu 'ariTi : 9拍

○2.njisjinu mimu 'ariTi : 8拍

[ʔumi] (海) の[ʔu]が消失し、方言にも存在しない音形[mi]が出現するのはなぜか。
[njisjinu 'umi]の[-nu 'umi]がつながると[nu:mi]となる。これは「長音禁止制約」に反する。
さすれば、[nu:mi]は[numi]とならざるをえない。音数律の強固な制約が、日常の方言に存在しない音形[mi]を許容したのである。

§ 3.2. 音数律と古音保持の関係 (まとめ)

場合①と場合②を比較してみよう。場合②では、音数律が音変化した新しい音形を活用するわけだから、母音の長短をぬきにすれば、日常の方言形に近い形が出現する。ところが、逆に場合①では音変化を阻害し、日常の方言よりも古い形が残されて出現する。音数律で長い拍が必要な場合に、音変化が阻止されることにも注意を払っておきたい。日常の方言で音の脱落という音変化が生じると、八月踊り歌の音数律の中では短い拍になって多くが必要な拍数に足りなくなってしまう。必要な長い拍を確保する意味で、八月踊り歌における音変化は阻止されるといえる。

§ 3.3 場合①の他の例

場合①の規則の適用によって古音が保持されている例をいくつか見ていこう。八月踊り歌の語彙を(歌謡)、日常方言の語彙を(方言)で示す。

◎「かえる」(変える)

- (9) 'uTa kaero kaero | Fusji kaero kaero | 'uTanu kawaribadu | wuduri kawaru

うた カエロ カエロ | フシ カエロ カエロ | ウたヌ カワリバドゥ | ウッドゥリ
カワル

歌を変えよう、変えよう、節を変えよう、変えよう、歌が変わってこそ、踊りも変わる
のだから。

(湾集落：大山 1995:7)

かえろ(歌謡) kaero <-> かえる(方言) 「he:」ru「N (上野・西岡 1993:212)

方言では[e:]と長母音化しているが、歌謡では[ae]の長母音化が回避されている。

◎「たかさ」(高さ)

- (10) taKasa gazjimaruja | kazjinji njiKumariTi | wanuja CjimuTaKasa | dusjiTu kaTaCji

タカサ ガジマルヤ | カジニ ニクマリてい | ワヌヤ ちムたかサ | ドゥシとう カた
ち

高いガジュマルは風に憎まれている。私は誇りが高く、友人と敵である。

(塩道集落：1996年6月28日、基井テルエ氏へのインタビューをもとに筆者が音声表記
した)。

たかさ(歌謡) taKasa <-> たかさ(方言) ta「:」sai (「高い」。上野・西岡 1993:306)

方言では[K]が脱落し[a:]と長母音化しているが、歌謡では脱落せずに長母音化が回避され
ている。

◎「はやさ」(早さ)

- (11) 'unaguCjiCji mariTi | 'uTa sjiranu 'unagu | hajaKu 'uCji muduTi | du waTa wi nasji

ウナグちち マリてい | ウた シラヌ ウナグ | ハヤク ウち ムドゥてい | ドゥ ワ
た ウィ ナシ

女として生まれて、歌を知らない女よ。早く家に戻って、自分の腹を上にしろ(寝てし
まえ)。

(上嘉鉄集落：生島 1994b:3)

はやく(歌謡) hajaKu <-> はやさ(方言) he「:」sa (「はやい」。上野・西岡 1993:308)

方言では[e:]と長母音化しているが、歌謡では[aja]の長母音化が回避されている。

◎「ほこらしさ」(誇らしさ)

- (12) su:nu FuKurasaja | 'iTujurimu masari | 'iTumu sunu guTunji | 'araCji tabori<注3>

スーヌ フクラサヤ | イとうユリム マサリ | イとうム スヌ グとうニ | アラち タ

ボリ

今日の嬉しさはいつよりもまさり、いつも今日のように有らしてください。

(湾集落：大山 1995:3)

ほこらしさ(歌謡) FuKurasa 〈-〉 ほこさしさ(方言) 「ho:」ra「sa (「うれしい」の意。

上野 1994:163)

方言では、k音が脱落して母音が長くなっているが、歌謡ではそれが回避されている。

◎「わかれる」(別れる)

(13) waKariTija 'iCjuri | nunu kaTami neranu | 'asjihadanu tinugi | 'uridu kaTami

ワかりていヤ イちゅり | ヌヌ カタミ ネラヌ | アシハダヌ ティヌギ | ウリドゥ
カタミ

別れては行く。何の形見もない。肌の汗を拭う手拭い、それこそが形見なのだ。

(湾集落：大山 1995:7)

わかれて(歌謡) waKariTi 〈-〉 わかれる(方言) 「wa:」ri「ru」N (上野・西岡 1993:290)

現象は(10)に同じ。

このように、場合①の規則の適用によって音変化が阻止され、結果的に古い音を残す用例が多数見られるのである。

§ 4. 音数律と古語法の保持

以下に述べる「形態変化阻止の現象」も、詩的言語(歌謡語)の「音数律」によって明確に動機づけられる。

§ 4.1 音数律の優先(その2)：「音数律が形態変化を阻止する」

日常の喜界島方言には存在しないが、その八月踊り歌の中には存在している語法がいくつかある。

本稿で対象となるのは、「連用形+有り・に」に起源をもつ語法(本稿では「アニ形」と呼ぶ)である。この語法は「～して、」という意味を表す。日常の喜界島方言は、標準日本語と同じく「連用形+て」に起源をもつ形(本稿では「テ形」と呼ぶ)でこの意味を表し、アニ形は使用していない。他のいくつかの琉球方言の中では、アニ形、すなわち「連用形+有り・に」に起源をもつ語法がいまだ廃れず存在している。沖縄首里方言での例を挙げる。

トゥヤーニ、tuja:nji, (取って、) イヤーニ、'ija:nji, (入って、)

この語法を喜界島方言の音韻に合うように置き換えて、喜界島方言の話者に「使うか」とたずねてみても、「使わない」と否定される。ところが、八月踊り歌の中にはこの語法が確かに存在している。

(14) CjijaNmeba turanji | waTa jamusu sjiranu | wa' uja Furimunuja | 'isaba tanudi

ちヤンメバ トゥラニ | ワた ヤムス シラヌ | ワ ウヤ フリムヌヤ | イサバ タヌ
ディ

恋患いを患って、腹を痛めていることを知らない私の親は馬鹿者であることよ、医者
頼みにして。

(上嘉鉄集落：生島 1994a:3)

[turanji] は「取り＋有り・に」(動詞「取る」の連用形＋有り・に)に由来する。

(15) 'amadarinu sjiTanji | 'asjijudumi sjiruna | kuKuru jasujasuTu | 'iranji 'imori

アマダリヌ シたニ | アシユドゥミ シルナ | ククル ヤスヤスとう | イラニ イモリ
雨垂れの下に足淀みをして立ち止まらないで下さい。心安々と入って来て下さい。

(上嘉鉄集落：生島 1994b:4)

['iranji] は「入り＋有り・に」(動詞「入る」の連用形＋有り・に)に由来する。

どうして八月踊り歌の中においては日常方言で廃れた語法が未だ存在できているのか。実は、そこにも音数律が深く関わっているのである(松永明 私信)。(14)の[turanji] (取って)で説明しよう。

○1. CjijaNmeba turanji (アリ形)

×2. CjijaNmeba tuTi (テ形)

1. を2. に形態変化させて置き換えることはできない。[CjijaNmeba tuTi]では7拍で、必要な8拍に1拍足りない。アニ形をテ形に置き換えることはどうしても不可能なのだ。このことから、音数律制約によって、すでに日常の方言ではなくなった古い語法が、新しい形に置き変わらずに保存されたという予測を立てることができる。

(15)の['iranji] (アニ形)と次の(16)の[sjinudi] (テ形)を比較してみよう。

(16) njisjiTu hjinganu manji | kaKurimiCji CuKuTi | miCjinu 'arumadija | sjinudi 'imori

ニシとう ヒカ°ヌ マニ | カくりミち つくてい | ミちヌ アルマディヤ | シヌディ
イモリ

西と東の間に隠れ道を作って、道のある限りは忍んでいらっしゃって下さい。

(荒木集落：晴永新一郎 1995:5、1996年6月22日、晴永氏へのインタビューをもとに筆者が音声表記した)。

6 拍 = 'iranji (3 拍) + 'imori (3 拍)

6 拍 = sjinudi (3 拍) + 'imori (3 拍)

動詞語幹の長短(「しのぶ」(忍ぶ)は「いる」(入る)より長い)によって、1 拍付加のテ形にしたり、2 拍付加のアニ形にしたりして、ふたつの語法を使い分けているようである。両者の区別は、音数律に合致させるための調節機能の役割を果たしているといえよう。

§5. 残された問題

一般に口承文学の言語は日常の言語よりも古風な形式をもつと言われる。それが、いったいどういうことを意味するのか、今まで筆者には定かではなかった。今回、音数律に着目し、その強い制約が音変化や形態変化を阻害することが認識できたおかげで、その主張の正当性にある程度の確信を持てるようになった。

また、筆者は、当初、八月踊り歌のようなテキストは、アイデンティティーの中心として「民衆詩」の一面を持ち、日常の方言に支えられて、歌詞はそこの方言のみで構築されているという勝手な想像をしていたが、どうやらそれも改めるべきである。アイデンティティーの中心という側面は肯定するとしても、それがすべて日常の方言に依拠しているというイメージは変更すべきかもしれない。喜界島八月踊り歌は決して「純粹」な方言で構築されていない。地元の方言に「こなされていない」要素が多く入り込んでいるのである。

今回は、定型的な詩的言語の音数律が古い要素を残す大きな要因の一つであると主張した。しかし、それだけでは説明しきれない部分が多く残されている。

一例を挙げたい。[karasu]「借らす」に対応する語(意味は「貸す」)は、すべての集落で語頭[k > h]のh音化を経た方言音をもつ(例。湾集落：[「hara」su「N」、上嘉鉄集落：[「hara」sji「:」。上野・西岡 1993:171)。ある集落(湾、坂嶺など)では、八月踊りの歌詞の中でも、[k > h]の変化を起こして方言音と同じ形で発音している(これには全く問題がない)。ところが、不思議なことに、いくつかの別の集落(上嘉鉄、荒木など)では[karasu]の語頭[k]がh音化せず、[k]のまま発音されている(下線部に注目)。

(17) haCjigaTuja narjuri | tubibaneja neranu | 'uTuzja kaTabaneja | haraCji tabori

ハチガとうヤ ナリュリ | トゥビバネヤ ネラヌ | ウとうジャ カタバネヤ | ハラち
タボリ

八月にはなったが飛羽根（踊り着）はない。姉さん、もう一つの踊り着を貸してくださいな。

（湾集落：大山 1995:3）

(18) haCjigaTuja naruri | tubibanIja neranu | 'uTuzja kaTabanIja | karaCji tabori

ハチガとうヤ ナルリ | トゥビバニイヤ ネラヌ | ウとうジャ カタバニイヤ | カラち
タボリ

(18)と同義。

（上嘉鉄集落：生島 1994a:2）

(17)では[haraCji]と[k]がh音化しているが、(18)では[karaCji]と[k]のままである。なぜこの(18)の[k]がh音化しないのか。ここには音数律など全く関わっていない。これに対する説明は、今のところ、日常言語とはレベルの異なる詩的言語の中に語彙が存在するからだという理由しか思いつかず、明確な動機づけを行うことができない。これから解明すべき課題の一つといえよう。

注

- 1 以下の諸氏から各集落の貴重な情報を得ることができた（五十音順）。記して御例申し上げる。

生島常範氏（上嘉鉄）、石原ヨシ氏（嘉鈍）、大山哲夫氏（湾）、龍田八重子氏（羽里）、富田勝己氏（佐手久）、習マス氏（城久）、初瀬一美氏（白水）、英啓太郎氏（坂嶺）、晴永新一郎氏（荒木）、基井テルエ氏（塩道）。

特に、生島氏、大山氏、英氏、晴永氏は、私家版の八月踊りの歌詞集を自ら作成し、お持ちである。筆者は、インタビューの際、それら私家版の歌詞集をもとに、聞き取り調査を行った。他の諸氏からは、筆者が直接耳で聞いて記録した。調査中、田畑英勝・亀井勝信・外間守善 1979 の「八月踊り歌 喜界島」の項に記載されてある歌詞を適宜参照した。

さらに、生島氏とは、喜界島滞在中、有意義な議論をかわすことができ、本稿執筆の契機となった。詩的言語（歌謡語）と日常言語（方言）との乖離という関心は氏との議論の中から生まれてきたものである。改めて氏に謝意を表わしたい。

松永明氏（法政大学大学院、沖縄文化研究所奨励研究員）には拙論の草稿を読んでいただき、特に§4. に対して貴重なアドバイスをいただいた。齋藤達哉氏（国学院大学大学院、沖縄文化研究所奨励研究員）には和歌の字余りに関連する論文を紹介していただいた。両氏にも感謝したい。

- 2 （音声表記） 上野 1992:46、上野・西岡 1993:162-163 にならう。

（仮名表記）非喉頭化音をカタカナ、喉頭化音をひらがなで表わす。[nɪ]は[ニィ]、[nga]は[カ°]、[wu]は[ウゥ]と書く。

- 3 この歌の第1句冒頭[su:nu FuKurasaja]の[su:]（「今日」の意）は「長音禁止制約」に対する例外である。この例外をどう説明するのか。実は、第3句に['iTumu sunu guTunji]とあり、この「今日」にあたる語[su]は短母音化している。もし、第1句を音変化以前の[*kiju]で発音するとした

ら、第3句目の[su]と同一語でなくなってしまうと良くないと判断されたのではないか。同一歌の中に同じ語彙が並存する場合には、同じ語彙であることを示す意味でも、長母音化した形を認めざるをえないのではないか。

引用文献

- 生島常範(編)(1994a)「上嘉鉄八月踊り歌集」伝承者：盛すみこ、値たきこ、私家版
生島常範(編)(1994b)「共通歌詞集」伝承者：盛すみこ、値たきこ、私家版
上野善道(1993)「喜界島方言の体言のアクセント資料」『アジア・アフリカ文法研究』21,41-160
上野善道(1994)「喜界島方言の活用形と複合名詞のアクセント資料」『アジア・アフリカ文法研究』23,151-236
上野善道・西岡敏(1993)「喜界島方言の用言のアクセント資料」『アジア・アフリカ文法研究』22,161-312
大山哲夫(1995)「八月踊り 湾集落用」(町中央公民館地域講座 湾八月踊教室用)、私家版
小川学夫(1983)「八月踊」『沖縄大百科事典 下』、沖縄タイムス、222-223
田畑英勝・亀井勝信・外間守善(1979)『南島歌謡大成 V 奄美編』、角川書店
服部四郎(1959)「七 琉球語および琉歌について」『日本語の系統』、岩波書店、134-152
英啓太郎(1990)「坂嶺(サンミ)集落八月踊り唄」、私家版
晴永新一郎(1995)「八月踊り唄集 荒木集落」、私家版

(にしおか さとし・東京大学大学院)